
Touch your hope.

神谷隆仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Touch your hope .

【Nコード】

N9410F

【作者名】

神谷隆仁

【あらすじ】

終末期医療病棟・通称7階。病棟直属看護師になった篠崎は、二人の患者と出会い、そして、7階にまつわる不吉な”約束”を知る。患者たちを救おうとする篠崎は、どうにもならない運命を悟り…。

（前書き）

前作「Hope in the room」 arrives at you」の看護師視点版という形になります。前作は勢いだけで仕上げたこともあり、今作とはいろいろ矛盾点もあるかと存じますが、平にご容赦くださいませ。

「序章」

神様なんていない。そう思ってた。

でも……。それは違うと思う。

この病棟には、神様なんか居ないけれど。

私に、ちつぽけな、私に、何が出来るというのだろう。

ねえ、教えてよ、神様。

「第1章」

1 /

小さい頃からの夢であつた看護師になつたのは、10年前のことだ。城北大学医学部付属病院に就職したのは、単に家から近かつたからに過ぎない。

最初の配属先は内科だつた。私は、ずっと内科に居るものだと思つていた。

…内科に勤めて1年後、私は、終末期医療病棟への転属を言い渡された。

2 /

「本日より、本病棟に配属となつた、篠崎看護師です。前は内科配属との事ですので、みんなで彼女に本病棟について説明していきましよう」

よろしく願います。そんな声がナースステーションに響いた。

- 私が初めて終末期医療病棟 - 通称7階 - に赴任したのは、透き通つた朝だつた。

3 /

私が赴任する前、一人の少女を受け持っていた。

私が赴任する前からずっといたらしいが、前任者の退職に伴って飛ばされた、初の患者さん。私には、その程度の認識しかなかった。「はじめまして。三村さん。本日より貴方の担当看護師となります、篠崎初美です。よろしく願います」

私は首から下げられた名札を見せる。…無反応。淋しい限りだ。

「何かありましたら、お気軽にナースコールでお呼び下さい。すぐに当直看護師が駆けつけますので」

私には、何故こんなにも彼女が無反応なのか、分からなかった。

それぐらいに、彼女は私に対して心を閉ざしていた。

ある雨の日、私は当直に当たった。私の高校時代から先輩の看護師と一緒にだった。

「井上さん…」

私は、少しためらいがちに言った。

「何？」

「403号室の、三村さんの話なんです…」

私は、井上さんに彼女が自分に心を開いてくれない旨を話した。

話し終えて、井上さんをちらりと見る。なにやら、考え込んでいるようだった。

しばらくしてから、彼女は重い口を開いた。

「…多分ね、彼女はさ、自分が長くないことをもう分かってるんだよ。自分が死んで、誰かが悲しむってことに、彼女は耐えられないんだよ。彼女は、いつでも願ってる。」ひとりで消えることが出来たら”ってね。…彼女は、強い子。本当に、強い子だから、我慢しちゃう」

井上さんは、うつむきながら、続ける。

「私が彼女を受け持った、一番最初の時期はね、彼女笑ってたんだよ。」

それが、1ヶ月、2ヶ月、半年となって、彼女は多分気づいた。”自分は、もう長くない”。だから、さ…」

最後の方は、涙が、あるいは雨かに、かき消されてしまった。

4 /

あれから何ヶ月たったのか、よくわからないけれど。

ある日の朝、私は三村さんの担当医だった堀先生に呼ばれた。

「堀先生、篠崎です」

どうぞー、という声が聞こえたので、ドアを押した。

「篠崎くん、君にこんな仕事を委ねるのは心苦しいが…」

先生は何をためらっているのだろう。普段もう少しはつきり言う人なのに…。

「三村さんに、来週から”7階”に移動するよう、伝えてくれるか」
目の前が真っ暗になったような、天地が逆さまになったような、そんなおかしい感覚が私を襲った。

堀先生の伝言を彼女に伝えるには勇気が要った。

誰が喜ぶのだろう。誰が悲しむのだろう。何の為の看護師なのだろうか。

私は、こんな仕事をする為に看護師になったんじゃない…。

それでも、仕事はしなければならなかった。それが、私の”仕事”
なのだと、自分自身に言い聞かせて。

「三村さん、体温を測りますね」

いつもの昼の検温に合わせて、私は堀先生からの伝言を伝えることにした。

「体温は…6度5分、正常ですね。…後三村さん、来週から病棟が変わります。来週からは7階の病棟で治療を受けることになりますので、準備よろしくお願いいたします」

それでも彼女は、無反応だった。

…彼女は知っているのだろうか。7階が、終末期医療で、実際の医療を施す場所でないことを。

命がつきるのを、待つ場所だと言うことを。

1週間後、いつもの場所に、彼女の姿はなかった。
当たり前のことなのに、どうしてこうも胸を締め付ける？
その理由が、私には、痛いほどわかるようで、よくわからない。

5 /

それから、半年ほどたって、私は終末期医療病棟に転任となった。

「…篠崎さん？」

「…え、あ、はい」

少し惚けていたようだった。

看護師長は唐突に話し始めた。

「ねえ、あなたはまだ知らないかしら。7階の約束」

「何ですか、それ」

「7階の患者さんは、4回以上仮退院をしない」

静かな口調で、でもはっきりと、不吉なことを言った。

仮退院は、文字通り完治しない状態ながら小康状態ということで便宜的に退院を認める制度だ。

この病棟で、「命がつきるのを待つ場所」で、その仮退院を4回以上しないとすることは、即ち。

ここで死ぬ…ってことだ。

「死に場所は、家か病棟。それ以外はない。逃げるなら、A駅じゃなくてB駅のほうがいい…。ずっと、患者さんたちの間で受け継がれてきた、悪い意味での伝承よ」

師長はそこで少しだけ、何かを思索するように間をおいて、こう続けた。

「ここは、まだ。まだ、医療施設なの…。どうして、人の死ばかり見つめる場所になったのよ…」

師長の顔は、何かの後悔に苛まれていた。

城北大学医学部付属病院は城北大学のキャンパスから遠く離れた、この近辺では最大のカトリック系の病院だと聞いている。

私が7階の病棟に来てまずはじめに思ったことは、他の病棟に比べヘルパーさんの姿をよく見かけるな、ということだった。

勿論他の病棟でも看護師の勉強ということで、看護学部の子生や、老齡の患者さんの手助けということでもヘルパーさんはいた。だが、ここはそれ以上によくヘルパーさんの姿を見た。

看護師よりヘルパーさんの方が多いいじゃないか、と思うぐらいにたくさんいた。

それは、ここが医療施設の端くれじゃないことを端的に表現していた。

担当医は常駐が一人、もう一人は専門で日ごとに別の人ややってくる。

常駐の稲生先生だけでは見られない専門的病状の人は、ほとんどの病棟にはいない。

しばらくこの病棟に勤務して気づいたことが2つある。

一つは、この病棟の患者さんにほとんど入浴制限・食事制限がないということ。

それがどういう意味なのか、すぐに察しがついて、少しかだけ慄然とした思いに駆られる。

もう一つは若い人があまりいないこと。

そういえば、若い人のほうが病状が進行しやすいと講義で習った。その影響なのかもしれない。

私が検温から戻ってくると、いつものようにナースステーション横の休憩室に彼女が座っていた。

休憩室には、白い花に黄色い花弁・水仙の花が、咲いていた。

そして、見かけない顔もまた、そこにあった。

「篠崎さん、ちょうどよかった」

師長は小走りで私の元へやってきた。

「篠崎さん、今日からあなたの担当の患者さんが一人増えます。…

あら、あの人だわ」

そういつて彼女の横に座る、若い男性の方を見る。

私は単純に珍しいことだと思わなかった。若い、男性。それだけで、この病棟では希少価値なのだった。

7 /

それからしばらくして、私は稲生先生に呼ばれた。

「今から904号室の佐藤さんの採血をしますから、器具の準備を頼みます」

採血の準備は一式揃えてナースステーションにある。私は少しだけ違和感を覚えながら採血セットを取りに行く。

904号室へ向かうと、既に稲生先生が居た。

コンコンと、扉を二度ほどノックして、入った。

「既に看護師の方から聞いていますとは思いますが、本日は採血をしますので…」

稲生先生に注射器とアルコールを塗布した脱脂綿を渡す。

丁寧に静脈のあたりを脱脂綿で拭いて、注射器の針を刺す。注射器の容器を朱が満たしたところで、針を抜く。

先生が注射器を確かめている間に、私がまた別のアルコールを塗布した脱脂綿で注射したところを拭き、消毒する。

ちょうど採血が終わろうとするところに、いきなり病室の扉が開いた。

あけたのは、彼女だった。

彼女は佐藤さんの腕を掴み、突如として走り出した。

「ちょっと待ちなさい！」

私は叫びながら、彼らを追いかけようとした。…だけど、その腕を誰かがつかんだ。

誰がつかんだかはわかつている。稲生先生だ。

「どうして、止めるんですか？」

私は努めて冷静に、問いただした。

「そうか、君はまだ知らないか。彼女はね、”2度目”なんだよ」

何の、という言葉が出てくる前に、先生は続けた。

「君も師長から聞いただろう。7階には、いくつか約束事がある。

彼女の前に、もう一人いたんだ。”約束事”から逃れようとした患者が」

8 /

「知っているか、車好きの患者さんがこの病棟にいたことを。実は以前はこの病棟の患者さんに対して明確な外出規制を敷いていないくてね。そんな折り、その車好きの患者さんは何をしたと思う？」

「…いや、わかりません」

「その患者さんはね、愛用のクルマ…名前はなんて言っただけな。えーとユーポスじゃなくて…」

「…ユーノス、ですか」

「そうそう、それぞれ。ユーノスに乗って、彼女は病棟と飛び出した。三村さんを連れて。だいたい1年と半年前かな」

とすると、私が彼女の担当になる半年前だ。まだ、前の担当看護師がいた頃だ。

「彼女たちは1週間ぐらいで帰ってきた。だけど、その後もう一回抜け出された。今度は車好きの患者さんだけでだ」

先生はそこで躊躇して、でも少しだけトーンを下げて話し続けた。

「…また帰ってくるだろう、という楽観予測が良くなかったのだろうか。私にはわからないが。…抜け出してから2週間後、患者さんはご遺体となって本病院に搬送されたんだ」

それは、死に場所を自分で選んだってことなんじゃないのか。私は、言葉を飲み込むしかなかった。…だって、続く言葉は、残酷にも思えたから。

「…悪いが、彼女たちの我が儘を許してやってはくれないか。医師としてどうかしているとは思う。だが、最期ぐらい自由にさせてやりたいというのもまた、この病棟の関係者全員の願いなのだから」

そう告げて、先生は病室を出て行こうとする。

「…忘れていたが、師長にだけは教えてやってくれ。彼女なら、何か力になってくれるはずだ」

第2章

1 /

「村上さん、少しお時間頂けますか」

三村さんの親御さん - といっていいものか - と会話していた師長を呼ぶ。

「篠崎さん、どうかしましたか」

「実はですね…」

先の顛末を全て告げた後、彼女の顔を見る。しばらく何か思案する風に黙り込んで、師長は口を開く。

「三村さんの方には伝えます。佐藤さんのご親族には伝えません。

…稲生先生がそうしろと仰るなら、そうさせてあげましょう」

そう言って三村さんの親御さんの元に歩み寄っていく師長。

私もそれに従った。

「三村さん、大事な話がございます。…少し長くなりますので、お手数ですが談話室までお越し下さい」

そう言った次に、私に稲生先生を呼んでくるよう命じた。

師長の顔に、悲壮感はなかった。あるのは、ただ、母親のような面影だけだった。

2 /

その日、病院の総合案内センターはそれほど混んでいなかった。

そんな中に血相を変えて飛び込んでくる男性が一人。

応対した案内嬢はただただ驚くほかなかった。…その男の人の発言

にも。

「く、車がないんだ!」

案内嬢は困惑しながらも病院のセキュリティマネージャを呼ぶことにした。もう完全に自分の領域ではないと思ったのだろう。

3 /

応対したセキュリティマネージャは20歳代後半といった感じの女性だった。

「それで、今回はどのような案件でしょうか。車がない、との話は伺っておりますが、詳細な部分が全くわかっておりませんので」
俺は車が盗まれたかもしれないことと、鍵を親戚の病室においてきたことを話した。

「…事情はわかりました。それで、その鍵は探されましたか。鍵があれば、病院関係者以外の第三者による犯行ということになりますので、直ちに警察と協議して動く必要があります。しかし、鍵がなければ、恐らくその親戚の方が車を使ってお出になったのでしょう」
まだ鍵を探してはいなかった。気が動転して、そこまで気が回らない状態だったのだ。

「では、一緒にその病室まで行きましょう。ご案内いたします」
若いセキュリティマネージャに先導されて、小さいエレベータに乗り込む。

…チン、という音がして、ドアが開く。

途中、セキュリティマネージャが看護師を呼び止めて、ついてくるようにいつていた。

何故だかわからないが、いやな焦燥感に襲われ始めていた。

4 /

「篠崎看護師、ちょっとお時間よろしいですか」

三村さんの親御さんとの話を終え、ナースセンターへ戻ろうとする

ところで、セキュリティマネージャに呼び止められた。

確か、名前は川渕とかいったはずだ。なぜ、病院全体の防犯管理を司る、セキュリティマネージャがここにいるのか。

もう、ばれたのか。少し早すぎるような気もしながら、落ち着いて応答する。

「なんででしょうか」

「三村京子さんの病室に案内していただけるかしら？患者さんのご親戚が来院されているの」

私は素直に従うことにした。もう抵抗は無意味だ。

902号室とかかれたプレートを見、私は振り返った。

「川渕さん、ここです。…三村さんの病室は。多分鍵はかかっていないと思います」

ドアを横に押す。白い、無機質な病室が浮かびあがる。

「ありがとう、篠崎看護師。あなたの仕事をしなさい」

そういわれても私は、ただただドアの隣にたち、彼女たちが何をするのかを見守ることにした。

5 /

「確かにこのバスケットの上に置いたのにな…」

車のキーはない。京子が持ち出したか。

「屋形さん、ありましたか。…私の方は、見つかりませんでした」
そうか。だとしたら間違いないだろう。

「…京子が持つて行ったのか」

「恐らく、そうなるでしょう」

「でも何のために」

「さあ。それはわかりません。…さて、どうされますか」

「どう、とは？」

「警察に被害届を出すのですか」

俺は咄嗟には答えを返すことができなかった。

それでも、こう答えるのが義務だろう。
「いや、あいつの好きにさせてください。…少しだけ、俺が不便になっても、あいつが好きなようにさせてやりたいんですよ」

6 /

病院の隣の、礼拝堂に生まれて初めてはいる。

私はキリスト教を信じているわけでもないし、家が敬虔なキリスト教一家、なんていうこともない。

それでも、彼女たちのことを思うと、祈るしかないと思った。

ギー、とドアは古さ特有の音をがなり立てながら、開いた。

コツコツ、と足が木製の床をたたく音が響く。

暗い礼拝堂には、先客がいた。

「…師長…」

目を閉じて、十字架を握りしめて。

師長のこんな姿を見るのは初めてだった。

「…篠崎さん。やはりあなたも…」

「ええ。彼女たちの無事を…」

そう言つて、師長の隣に膝をつく。

見よう見まねではあつたけれど。

「アーメン、と。」

唱和するほかなかった。

どれほどの時間、手を組み、目を閉じ、熱心に祈っていただろうか。
また、礼拝堂のドアが開く。

「…あ…」

漏れた声は、聞き覚えのあるものだった。

振り返った私に、稲生先生は少しだけ照れて見せた。

「君もかね、篠崎君、中川師長」

声が出ない私に代わつて、師長が答える。「ええ」と。

「そうか。彼女たちの足取りは杳として知れない。が、できる限り

の事はしなければいけないだろうね。：既に知り合いの病院や公的機関には伝えておいた。見つけたら、こちらに伝えるように、とね」

それは、まるで成長を見守るような父親の声だった。
私には、「見つけたら捕まえろ」じゃなくて、「見つけたら伝えるように」という先生の優しさと思いやりのぎりぎりの境界が見えたような気がした。

また、どれぐらい祈っていたのだろうか。

先生が立ち上がった。

「まだ待っている患者さんがいるだろう」と疲れたように笑いながら。

7 /

翌日は穏やかに過ぎた。

勿論三村さんの家族と協議して、もし向こうから電話があれば、即座に薬か薬箋を届けることにした。

三村さんの母親は、休憩室に活けてあった水仙の花を愛おしそうに眺めていた。

佐藤さんの家族が見舞いに来たことはないと師長が言っていたから、もうどうにも手の出しようがなかった。

2日目、3日目、4日目、5日目。

病院に電話がかかってくるのを、ただただ待ち続けた、そんなある日。

「はい、こちら城北大学付属病院終末期医療病棟、担当看護師は篠崎です。どちら様でしょうか」

「あー、こちらね、大阪府泉佐野市のね、木舞薬局って言うんだけどね」

「はあ、どのようなご案件でございますか」

「うちについさっきあんだのころの薬箋を持ってきた人がいるんだけど」

ピンと来た。間違いなく、彼女たちだ。

「こちらの病棟で処方したものですか。こちらの病棟では、処方箋一枚一枚に患者さんの氏名を記載しているのですが、記録をお持ちですか？」

「えーと、ちよつと待ってね。確かこの辺に……。お、あつたあつた、これこれ。えーと、うん、終末期医療病棟の、三村、京子、様になつてるね」

「えと、少しお聞きしてもよろしいですか」

「どうぞ」

「その処方箋を提出した際、二人でしたか」

「いんやー、それがね、20歳前半ぐらいの若い兄ちゃん一人だったんだよ」

それは、つまり、彼女の容態が芳しくないと言うことなのだろうか。

「もう一つ、なぜ本病院にお電話いただいたのですか」

「あー、それがね。彼らね、薬を持って行っちゃったの、お金払わずにね」

「それから、彼らは？」

「車で、西の方へいつちまった」

「……有り難うございます。何か他にございますか」

「……えーと、そちらの病棟にね、稲生つていう医者いる？」

「確かに稲生医師はこちらの所属ですが」

「その人の同期の、木舞栄五郎は大阪で元気にやっとな、って言うてくれへんか」

「わかりました」

「……あ、ちよつとちよつと。薬のお金はいらないからね」
受話器を置き、小走りで診察室へはいる。

ちよつと患者さんもない、”空白”の時間帯だったらしい。

「稲生先生、先ほど大阪府泉佐野市の木舞薬局からお電話がありました」

「何だつて？大阪府泉佐野市の薬局？随分遠いじゃないか、聞き間

違いじゃないのかね」

「いいえ、確かにそう仰いました」

「…そう、続けて」

「三村京子さんと、佐藤真之さんと思われる人物を確認したそうです」

「何だつて！無事なのか！」

それまで、カルテの整理もしながら聞いていた先生が一気にこちらを振り返る。

その顔には、明らかな歓喜の色が見て取れた。当たり前だろう。

「薬を処方したそうです。無償で」

「…そうか。薬が切れたか」

先生の顔色が、青ざめたものになる。

「…薬は…」

「ただで持つて行ってしまったようです」

「そうか」

先生は心持ちか気分を上向かせたようだった。

「あ、それと、小舞栄五郎さんより、元気にやっている、とのことですよ」

「……小舞か。それはいいところに辿り着いたんだな。本当に」

8 /

それから数時間ほどして、病院の事務員から受話器を渡された。

「はい。終末期医療病棟看護士の篠崎ですが」

「…篠崎さんですか」

くぐもつてはいるが、間違いなく「彼」の声だった。

「…今どこ？」

「…兵庫県、明石市の手前、ですかね…」

「そこでちよつと待つてなさい」

「それは無理な相談ですよ、篠崎さん」

「どうして」

「篠崎さん、淡路島の名物は？」

突然なんだろう、とは思ったが答えることにした。

「タマネギ、とか」

「違う」

困った。淡路島、淡路島…。

まさか。

「ラッパスイセン、かしら」

「正解。今から、そこへ行くんです。もう薬もない」

「薬なら、今から届けに行くわ」

「…どれくらいかかりますか？」

「半日あれば十分だと思います」

「そうですか」

「…じゃあ、淡路島についたら連絡頂戴。待ってるわ」

9 /

稲生先生の診察室に入る。

「先生、先程連絡がありました、今明石市の手前だそうです。…今から、私が薬を届けにひとつ走りってきます」

「君が？」

先生は心底びつくりしたような顔をする。

「…免許ぐらいはありますよ」

「そんなことは心配してないよ」

先生はひとしきり笑った後、笑顔でこう言った。

「行ってきたさい。患者の命を救うのは、我々の責務に他ならないのだからね」

第3章

1 /

ナース服を脱ぎ捨てるようにロッカーに戻す。

今の姿を出来れば誰にも見て欲しくはない。

多分、「あの頃」の顔に戻っているはずだから。

私の史上最大の汚点の、あの頃に。

家のガレージを開けるのもどかしい。

ガレージが開ききると、そこにあるのは、赤い車体のスポーツカーが一台あった。

…赤い、ユーノスが。

2 /

明石市まで速くて半日以上はかかる。

その頃には既に淡路島に入っている可能性も十分あり得た。

だから、明石海峡大橋をとりあえずのゴールとした。

彼女たちの命の灯火は病魔におかされているというだけでも十分に短くされてしまっている。

そこに今度の無茶、そして投薬治療がない状態。

…不吉だが、いつ、どんな風になってもおかしくはなかった。

3 /

…ここまで来たのか、と思う。

眼前には大きく広がる銀の景色。

明石海峡大橋の、足下まで来た。

彼女たちはもう淡路島に入ったのだろうか。

よく分からないまま、連絡を待つ。

寒空の下、携帯が震えるを待つ。

10分ほどしただろうか。突然携帯が鳴った。

「…はい、篠崎です」

「…今、淡路島に入りました。もうすぐ、スイセンも見ええると思います」

「…そう。スイセンが見えたら、少し待っていて頂戴。必ずあなた

たちを助ける。いいわね？」

「……はい」

先程の少し長い沈黙が彼女の心に暗い影を落とす。だが、そんな悠長に時間は待つてくれない。

彼女はまたユーノスに乗り込み、淡路島を目指す。

4 /

淡路島に入り、スイセンの見える場所を探す。

20分ほどして、銀色の車が見える。

あれか…、と思い、車を止める。

薬を持って、車の窓をのぞき込む。

誰もいない…：ような気がして、もう一回のぞき込む。

車の中には、本当に誰もいなかった。

彼女の不吉な予感が的中してしまった一瞬だった。

5 /

「もしもし、稲生先生はおられますか！？」

「…少々お待ち下さい」

電子音の奏でるメロディーもこのときはやはり彼女をより苛立たせる効果しか持たなかった。

「はい、終末期医療病棟担当医の稲生です」

「篠崎です、先生」

「どうしたんだね、篠崎君」

先生の声音はいつも通り、落ち着いている。私も落ち着かなくちゃ。

「先生、三村さんたちがいません。車だけです」

「…なんだって、いないって？」

「ええ」

「そうか、君。近くに海が見える場所はあるか」

「は？」

「いいから探すんだ」

「は、はい」

私は走ってきた道を思い出す。

ある。一カ所だけ、海岸が。

「先生、今いる場所からそう遠くない場所に海岸があります」

「そこへいけ。いるはずだ」

先生の声は焦燥に駆られていた。

6 /

海岸沿いに歩く。彼女たちの姿は一向に見えない。

「何か手がかりはあるかね」

「いや、何にもありません。…あれは、靴？」

「靴？」

私は少し離れた場所に茶色の靴が二足揃えておいてあるのに気がついた。

「先生、多分…」

「皆まで言わなくとも分かった。帰ってきなさい。警察に連絡するから」

「しかし…」

「今、この場で、君が出来ることは、何だね？」

先生は、無理矢理に抑えたような声音で喋る。

「分かりました。先生」

第4章

1 /

「はい、城北大学医学部付属病院終末期医療病棟、担当看護師の篠崎です」

「あー、そちらが城北大学さんね。こちら、兵庫県警の宮森と言います」

「何のご用でしょうか」

「お宅の病院の患者さんをうちで預かっているから、移送させていただきます旨、ご連絡差し上げたまでです」
私は歓喜した。だが、続く言葉は残酷だった。
「一人は女性の方で、救命処置を施したんだけど、駄目だった。もう一人の男の人は助かっているよ」

2 /

「稲生先生、よろしいですか」
コンコンとノックする。
「うん、かまわない、入ってきたまえ」
「三村さんたちが見つかったそうです。先程兵庫県警より連絡がありました」

「県警はなんと」

「三村京子さんの死亡確認、佐藤真之さんは現在県警のパトカーで移送中だそうです」

先生も、私も重い沈黙にとらわれる。

「…なんということだ。私は医者なんだぞ」

ドンと、机を殴る鈍い音がする。

先生の嚙り泣く声が聞こえる。

…私は、と言うと。

泣くことさえも出来ないほど、悲嘆に暮れていた。

3 /

また、あの礼拝堂に入る。

今日は誰もいない。月も三日月で礼拝堂の中は仄暗かった。

- ねえ、神様。

どうして、誰も救えないの？

神様なんて言う存在を信じている訳じゃない。

それでも問わずにはいられない。 - なぜ、救えなかったのかと。それは我々の使命だと、どこかで呟く自分がいる。

それは最初から無理な話だったのだと、どこかで嘯く自分がいる。相反する想いが、叶わぬ願いを祈らせる。

4 /

彼の帰ってくる日、終末期医療病棟スタッフ総出で出迎えた。

「お帰りなさい」

唱和した声は、彼のためか、それとも「彼女」の為か。

それから数日して私は彼の検温の為に病室を訪れた。

「佐藤さん、検温しますよ」

体温計を渡して、レポートを取り出す。

ピピッと無機質な電子音が響いたのを確認して、私は体温計を見る。「6度5分ですね。問題ありませんね。何かありましたらお手元のナースコールを遠慮無く押してください。スタッフが駆けつけますので」

いつも通りの会話を交わして、病室を出ようとドアに手をかけたとき、

「篠崎さん」

彼から突然、声をかけられた。

「何ですか」

「『7階の約束』って知ってますか」

私は、奈落の底へ落ちていくような感覚を味わった。

彼はそれを知ってか知らずか、話し続ける。

「7階の患者は4回以上仮退院しない。死に場所は家か病院、それしかない。逃げるなら、A駅じゃなくてB駅じゃない」

「…そんな不吉なこと、言わないでください」

私はやっと平常心で声を絞り出した。

「分かってはいます。でも聞いてください。-彼女との、約束なんです」

私は、まるで金縛りにあったように、ただ立ちすくむしかなかった。

「もう一つ、そこに付け加えよう。『残すものには、笑ってあげて』」

終章

その話を聞いた数日後、彼は折からの白血病が急変し、懸命の治療も甲斐無く、亡くなった。

彼の死を聞いたその日、私と稲生先生は病院長からこう告げられた。「しばらくは、終末期医療は別の病院に担ってもらうことにするよ」多分今回の件が問題になったのだろう。そのことは容易に予測できた。

私は、新しい患者さんが来たら、こう告げるために、終末期病棟にいた。

「『残すものには、笑ってあげて』」

その言葉が、どれだけの患者さんを救うのかはまだ分からない。でも、待合室に並ぶ白色に黄色の花を見て、いつも思い返す。

ここに、「存在した」証を刻み込んだ二人の患者の名を。

だから。

ナルキッソスの花は、絶えることなく、ここに咲き続けるのだろう。あの言葉を忘れさせないために。

まだ見ぬ患者さんを、救うための言葉を。

そして私は。

今日もこうしてあの礼拝堂に来て、こう祈るのだ。

「安らかに眠れ。」

（後書き）

今回は間に5回近くもパソコンのリカバリが入った挙げ句、色々忙しくて執筆に時間がかかってしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9410f/>

Touch your hope.

2010年10月10日07時04分発行